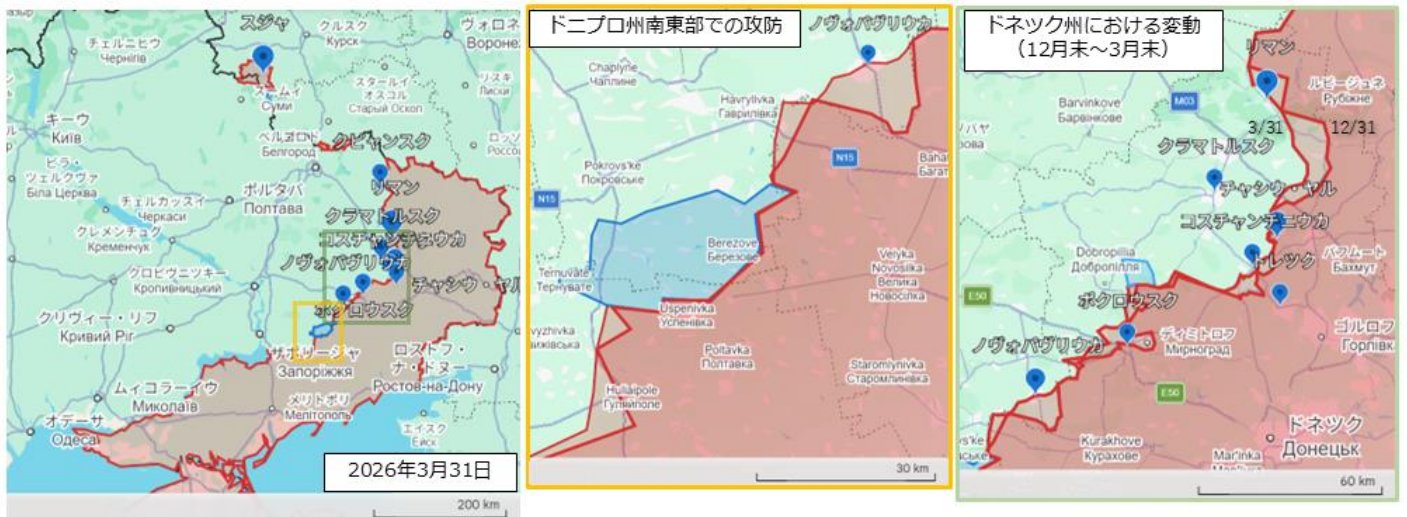


ロシア・ウクライナ戦況メモ 2026 年 1～3 月

地域研究部 米欧ロシア研究室長 山添 博史



ロシアによる制圧地域（赤色）およびウクライナによる奪還・戦闘地域（青色）の概略
 出典：Institute for the Study of War. December 31, 2025; March 31, 2026 よりGoogle Earth利用で筆者作成

ロシア軍がドネツク州で前進、ウクライナ軍が反撃努力

本稿は 2022 年 2 月以来のロシア・ウクライナ戦争において 2026 年 1 月～3 月の期間の主な推移を扱う¹。ロシア軍は引き続き主要な攻撃の場所を選び、ウクライナ軍に防衛を強いることで、主要なイニシアチブを保持し、ウクライナ軍は部分的な反撃を行った。

ロシア軍は多くの正面で前進を試みウクライナの防衛に圧力を加えているが、反撃を受けて後退する局面もある。2025 年 12 月にハルキウ州クピャンスクで後退を強いられたまま、2026 年 3 月までに盛り返すことができなかった。ドネツク州中部からドニプロペトロウスク州南東部とザポリージャ州北東部の境界地帯に向かってロシア軍は前進してきたが、戦争研究所（ISW）の評価では、2026 年 2 月上旬にスターリンク端末の「無許可利用」が遮断されて指揮統制に支障が生じ、その頃にウクライナ軍の反撃を受け、ロシア軍の占領地は大きく後退した²。ただし、この場所はもともとロシア軍が明確に占領を確立していない状況だったとの評価もある³。いずれにしても、この方面でもロシア軍はフリヤイポレに進軍しノヴォバヴリウカに迫っており、ウクライナはドネツク州を越えたところでも後退を強いられた。

ポクロウスクをロシアが制圧したと主張した 2025 年 11 月以降も、市内でウクライナ部隊による戦闘は継続し、ロシアが制圧して活用する段階にはならず、2026 年 1 月 21 日にはウクライナの東部軍(Skhid)

は同市北部および東隣のミルノフアドで防衛線を維持していると述べていた⁴。しかしその頃から段階的に両市の防衛拠点からウクライナ部隊が撤収したと見られる。ISW は 2 月 25 日の分析で、ウクライナ軍による市内での戦闘行動が観測できないとして、ロシアが制圧した可能性が高いと評価した⁵。その後、ポクロウスクから西で戦闘地域の拡大が観測されており、ウクライナはポクロウスクを放棄して防衛を強いられる段階に入った。

ウクライナのドネツク州のうち統治範囲には人口規模 7 万のコスチャンチニウカ、10 万のスロヴァンスク、15 万のクラマトルスクがあり、これらは多くの人々の生活拠点であり、2014 年以來防衛拠点としても強化しており、ウクライナはロシアによる占領に明け渡すことを拒否する姿勢を保っている。ポーランドの東方研究所 (OSW) の分析は、これらの「要塞線 (Fortress Belt)」に対し、ロシア軍が南 (ポクロウスク/コスチャンチニウカ方面)、北 (リマン方面)、東 (バフムート方面) から同時に圧力を加えており、幹線道路の利用が脅かされるようになれば要塞線の持久が困難になっていくと指摘する⁶。

ロシア軍はシヴェルスクを制圧したのちも西に進み、少し北西のリマンにも迫っている。要塞線南部の重要拠点コスチャンチニウカの近傍にも戦闘地域が迫っており市街地が砲撃範囲に入るようになってきた。ロシア軍はコスチャンチニウカとスロヴァンスク方面を結ぶ幹線道路 H-20 へのドローン攻撃を行っており、2 月 27 日の ISW の分析はこれを、地上連絡線 (GLOC) を妨害し補給効果を弱らせて地上攻勢を準備するものと評価する⁷。また、ロシアは装甲車両を伴う局地的な小規模襲撃も行っており、ドローン、砲兵、機甲部隊を組み合わせた前進条件を準備しているとみられる⁸。

このようにロシア軍の前進が見られるが、それは多くのコストを伴うものであり、ウクライナ軍の適応も展開していて、ロシアの成果は十分に大きくはない。戦略国際問題研究所 (CSIS) における推算では、2022 年 2 月から 2025 年 12 月までのロシア軍の人的損害は死傷者およそ 120 万人、戦死がおよそ 27.5 ~ 32.5 万人という規模にのぼる一方、2024 年以降に前進を続けている状況でも 1 日あたりおよそ 15 ~ 70m であり、過去の戦争の事例と比較しても成果に乏しい⁹。カーネギー国際平和財団のマイケル・コフマン主任研究員は、戦争の 4 年間で振り返り、ドローンによる偵察・攻撃がカバーする「キルゾーン」が 15km 以上になった環境で、少数のロシア歩兵が防衛線に浸透して支配領域が不明瞭になっていく状況を指摘し、双方が適応しながらの消耗戦で耐久力をめぐる競争となっていると特徴づける¹⁰。

戦闘継続をめぐる競争

ロシアは戦場でウクライナを屈服させる実力を示すことはできておらず、並行してウクライナ国内に打撃を与える武力行使や、ウクライナへの支援を鈍らせるような諸外国への働きかけも続けた。

2025 年を通じて、ロシアの長距離攻撃向けドローンの生産力が向上し、2026 年 1 月～3 月には毎月 4,000～6,000 回のドローン攻撃によってウクライナでは毎月 500～600 回の打撃を受けた¹¹。ウクライナにとっては 4 回目の冬で、最も厳しい冬の寒さのなかで、最も多くの攻撃を受け、民間の死傷者に加え、エネルギー・インフラへの打撃により多くの人々が暖房不足・電力不足に苦しめられた。しかし国家・社会はなおも忍耐力を示し、損害箇所を復旧し、政権の運営を調整し、諸外国に働きかけ、前線と国土の防衛を続け、ロシアによるウクライナ屈服の目的をこの冬にも阻止した。

ウクライナはロシアの戦争継続を困難にし、やがて不可能にしていくことを狙った打撃手段を準備してきた。ウクライナ国産の巡航ミサイル FP-5 フラミンゴが 2 月 20～21 日にヴォトキンスクの軍需工場を攻撃し¹²、ドローンが 3 月下旬にサンクトペテルブルク付近のウスチ・ルーガ港やキリシ製油所を攻撃した¹³。このような攻撃がロシアの石油輸出を長らく 40%削減するといった決定的効果は持たないが、継続的な実施により、ロシアは迂回や回避、復旧のコストを負っていく効果がある。

ウクライナの防衛の問題は、ウクライナと協力国の共通の利益と見なされる場面が増加している。NATO の軍事演習 Hedgehog 2025 において前線経験のあるウクライナのドローン運用者が相手側集結地を短期間で捕捉する成果を挙げ、NATO 加盟国が現代戦における指揮統制の課題を発見しウクライナとともに適応していく意義が指摘されている¹⁴。2 月 28 日に米国とイスラエルが開始した武力行使への反応としてイランが湾岸諸国に大規模なドローン攻撃を開始したのに対して、ウクライナはシャヘド系ドローンに対する迎撃の技術と運用経験を提供することを申し出て、UAE、サウジアラビア、カタール、クウェート、ヨルダンに専門家を派遣した¹⁵。

このようにウクライナと協力国の軍事協力の利益が深まるなか、欧州諸国が支出額を増してウクライナに米国製軍需物資を供給する「ウクライナ優先要求リスト」(PURL)の枠組みが稼働しており、2025 年には軍事支援がおおよそ 310 億ユーロ、財政・人道支援がおおよそ 350 億ユーロの水準だった¹⁶。米国のトランプ政権が直接的な支出による支援を削減したものの、欧州諸国がコミットメントを増してウクライナの資源不足を補うようになった。ロシアの立場では、ウクライナへの支援を切り崩して孤立無援にする試みが失敗しており、ウクライナを屈服に導く道筋は見えていない¹⁷。

戦闘が続く中でも、戦闘終結をめぐる対話は行われた。2026 年 1 月 23 日に米・露・ウクライナの三

者が初めて直接協議を行う段階がアラブ首長国連邦（UAE）のアブダビで始まった。2月17日～18日にはジュネーブで第3ラウンドの協議が行われ、実務協議が進んだとされる。その後、3月末までに同種の協議の継続は発表されず、国際情勢の複雑化や協議の進展の困難さがうかがわれる。報道では、ウクライナがドネツク州の統治地域をロシアに明け渡すことが困難であることが目立って触れられる¹⁸。ウクライナの立場では、仮にこれに同意するという不公平に大きな譲歩をしたとしても、その代わりに戦闘終結による安定が得られると信じられる条件はまだ整っていない（2022年3月にウクライナは中立化と安全の保証を定める条約草案の協議をロシアの担当者と進めていたが、4月15日にロシアの大統領はウクライナに安全が保証されないような書き換えを行った¹⁹）。ウクライナが重大な権利を断念してロシアの要求を受け入れる状況も、条件に納得して停戦合意に進む状況も、ロシアや米国はまだつくり出せていない。これまでと同様に2026年1月～3月にも、ウクライナが応戦せざるを得ないような攻撃をロシアは続けており、ウクライナは抗戦努力を維持した²⁰。

1 本稿は両軍の前線に関わる状況を中心とするメモであり、この戦争に伴う多くの問題を十分には扱わない。また、2014年2月からロシアがウクライナ領土に対する主権侵害を続けていることは「侵略」や「戦争」と称しうるが、本稿では2022年2月にロシアが公然とした軍事作戦を開始しウクライナ全体が戦争状態になっていることをもって「ロシア・ウクライナ戦争」と呼ぶ。

2 “Russian Offensive Campaign Assessment, February 24, 2026,” Institute for the Study of War, February 24, 2026, <https://www.understandingwar.org/research/russia-ukraine/russian-offensive-campaign-assessment-february-24-2026/>

3 Katherine Spencer and Marc Goedemans, “Russian army faces comms crisis amid Starlink cut and Kremlin crackdown,” Atlantic Council, March 5, 2026, <https://www.atlanticcouncil.org/blogs/ukrainealert/russian-army-faces-comms-crisis-amid-starlink-cut-and-kremlin-crackdown/>

4 “Ukraine’s defence forces control northern parts of Pokrovsk and Myrnohrad – Ukrainian military,” Ukrainska Pravda, January 21, 2026, <https://www.pravda.com.ua/eng/news/2026/01/21/8017279/>

5 “Russian Offensive Campaign Assessment, February 25, 2026,” Institute for the Study of War, February 25, 2026, <https://www.understandingwar.org/research/russia-ukraine/russian-offensive-campaign-assessment-february-25-2026/>

6 “The Russians are advancing towards Sloviansk and Kramatorsk. Day 1462 of the war,” Centre for Eastern Studies (OSW), February 24, 2026, <https://www.osw.waw.pl/en/publikacje/analyses/2026-02-24/russians-are-advancing-towards-sloviansk-and-kramatorsk-day-1462-war>

7 “Russian Offensive Campaign Assessment, February 27, 2026,” Institute for the Study of War, February 27, 2026, <https://www.understandingwar.org/research/russia-ukraine/russian-offensive-campaign-assessment-february-27-2026/>

[2026/](#)

- ⁸ “Russian Offensive Campaign Assessment, March 20, 2026,” Institute for the Study of War, March 20, 2026, <https://www.understandingwar.org/research/russia-ukraine/russian-offensive-campaign-assessment-march-20-2026/>
- ⁹ “Russia’s Grinding War in Ukraine: Massive Losses and Tiny Gains for a Declining Power,” Center for Strategic and International Studies, January 27, 2026, <https://www.csis.org/analysis/russias-grinding-war-ukraine> ; “Russia-Ukraine War in 10 Charts,” Center for Strategic and International Studies, February 24, 2026, <https://www.csis.org/analysis/russia-ukraine-war-10-charts>
- ¹⁰ Michael Kofman, “Ukraine’s War of Endurance: The Fight for Advantage in the Conflict’s Fifth Year,” *Foreign Affairs*, February 16, 2026, <https://www.foreignaffairs.com/russia/ukraines-war-endurance>
- ¹¹ Igor Anokhin, “Monthly Analysis of Russian Shahed 136 Deployment Against Ukraine,” Institute for Science and International Security, April 7, 2026, <https://isis-online.org/isis-reports/monthly-analysis-of-russian-shahed-136-deployment-against-ukraine>
- ¹² “Russian Offensive Campaign Assessment, February 21, 2026,” Institute for the Study of War, February 21, 2026, <https://understandingwar.org/research/russia-ukraine/russian-offensive-campaign-assessment-february-21-2026/>
- ¹³ “Huge fires at Russian oil facilities following Ukraine strikes, satellite images show,” BBC, March 31, 2026, <https://www.bbc.com/news/articles/c9qdwpnwzwp0>
- ¹⁴ Charles S. Oliviero and Phil Halton, “The Menace of Misunderstanding: Learning the Wrong Lessons from Ukraine’s Drone-Saturated Battlefields,” Modern War Institute at West Point, March 11, 2026, <https://mwi.westpoint.edu/the-menace-of-misunderstanding-learning-the-wrong-lessons-from-ukraines-drone-saturated-battlefields/>
- ¹⁵ “Ukraine deploys units to 5 Middle East countries to intercept drones,” Defense News, March 20, 2026, <https://www.defensenews.com/global/mideast-africa/2026/03/20/ukraine-deploys-units-to-5-middle-east-countries-to-intercept-drones/>
- ¹⁶ “Ukraine support after 4 years of war: Europe steps up,” Kiel Institute for the World Economy, February 11, 2026, <https://www.kielinstitut.de/publications/news/ukraine-support-after-4-years-of-war-europe-steps-up/>
- ¹⁷ «СБУ прицелилась в энергообъекты России,» *Nezavisimaia Gazeta*, March 26, 2026, https://www.ng.ru/armies/2026-03-26/1_9462_ukraine.html
- ¹⁸ “Ukraine dissatisfied with ‘difficult’ talks, US sees ‘meaningful progress’,” *Cyprus Mail*, February 18, 2026, <https://cyprus-mail.com/2026/02/18/zelenskiy-says-he-is-dissatisfied-with-latest-russia-talks>
- ¹⁹ 山添博史「ロシア・ウクライナの 2022 年停戦協議文書」(NIDS コメンタリー) 防衛研究所、2025 年 4 月 15 日、<https://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary370.pdf>
- ²⁰ 「【解説】 ウクライナは今も果敢、敗北に近いとは思えない……BBC 国際編集長」BBC、2026 年 2 月 26 日、<https://www.bbc.com/japanese/articles/c86y0yj291po>

PROFILE

山添 博史

地域研究部 米欧ロシア研究室長

専門分野：ロシア安全保障、国際関係史

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp